いのちと地域を守る

ネットワーク三宅島代表 ── 宮下加奈さんに聞く

噴火災害 次代へどう伝承

溶岩流跡に遊歩道…遺構保存の意義

過去学び未来守る力に

三宅島は20世紀以降だけでも1940年、62年、83年、2000年と大きな噴火が発生しました。そのため、島内の各地に災害遺構がたくさん残っています。

私が住んでいた集落は、83年の噴火の溶岩流で約400戸が埋まりました。通っていた小中学校にも溶岩流が押し寄せ、制服もカバンも靴も、それまでの記録も全て失いました。

島民は今も毎日、噴火の傷跡を見ながら生きています。火山泥流に埋もれた神社は、鳥居の上の部分だけ地面から出た状態です。集落跡地では、溶岩流が突き破った中学校が残っています。

苦労受け継ぐ

噴火災害の伝承のため、島は真っ黒な溶岩の岩石が広がる集落跡地に遊歩道を造り、案内板を設置しました。被害の大きさだけでなく、どんな集落があり、生活がどんなものだったかを島外の人にも伝えています。

同時に島の住民にも噴火災害の被害と苦労を受け継いでいくことも重要です。子どもたちの「何があったの」という問い掛けに対し、私たち大人は答えないといけない。そう考えると大人たちも過去を学び、それを正しく伝えようとの思いを自然に抱きます。

災害遺構は訴える力が強いだけでなく、見た人に関心を持たせる効果もあります。無理なく、世代を超えて自然に災害が伝承されるサイクルが生まれているのです。

生きた証しに

かつて集落がここにあったという事実を示している点も、遺構が持つ大事な意義です。確かにこの地域で暮らしていた人たちがいて、私にとっても、自分が生きていたことの証しになります。

女川中のみんなは震災を体験し、10代の前半にして命の大切さや物のありがたさを知りました。つらい思いはしただろうけど、人生にとって大きな経験をしているはずです。同じように災害で悲しむ人を少しでも減らし、多くの命を守るための女川中の取り組みが、世界につながっていけば素晴らしいと思います。

みやした・かな　東京都三宅村出身。中学２年だった83年に島で噴火が起き、自宅や父母が営んでいた理容店なども溶岩流にのみ込まれる。2000年の噴火に伴い、同年９月に江戸川区の公営住宅へ避難。三宅島島民連絡会事務局などを経て、05年の全島避難解除を機にネットワーク三宅島を設立。10年４月から減災・復興支援機構専務理事。専門は市民減災学。東京都江戸川区に住む。44歳。

三宅島の震災遺構について生徒に説明する宮下さん

減災・復興支援機構理事長　木村　拓郎さん

記録保存 様々な形で

災害の怖さや悲しみを伝えることが、今後の被害を減らす対策になる。被災地の外の人にとって被災者の体験談は重く、影響力は大きい。機会を見つけて、積極的に話をしてほしい。

一人一人が取り組めば輪が広がる。みんなが家で震災のことを話し合っているのには感心した。まずは身近な人にしっかり伝え、時間がたっても続けてもらいたい。

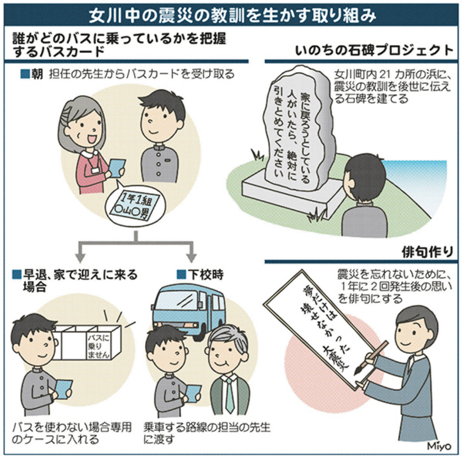
震災では避難の大切さだけではなく、避難生活の大変さも実感したはずだ。それも文字にしてまとめておこう。災害は時間の経過とともに状況が変わる。記録をしっかり残すことが大切だ。

3年生は卒業するが、これまでの活動を途切れさせないための工夫が必要になる。同窓会のような団体をつくり、卒業生も一緒に活動する場を設けることを勧める。

例えば、みなさんの石碑を建てる計画の他に、卒業記念の植樹のように石碑を毎年一つずつ設置してはどうだろう。建てっぱなしではなく、毎年3月11日に石碑をチェックする。それら一連の行動が情報発信にもなる。

将来の減災のためには、いろいろな形で震災を伝承することが効果的だ。2年生もしっかり3年生の意思を受け継ぎ、頑張ってほしい。

女川中の震災の教訓を生かす取り組み



誰がどのバスに乗っているかを把握するバスカード
■朝　担任の先生からバスカードを受け取る
1年1組
○山○男
■早退、家で迎えに来る場合
バスに乗りません
バスを使わない場合専用のケースに入れる
■下校時
乗車する路線の担当の先生に渡す
いのちの石碑プロジェクト
女川町内21カ所の浜に、震災の教訓を後世に伝える石碑を建てる
家に戻ろうとしている人がいたら、絶対に引きとめてください
俳句作り
震災を忘れないために、1年に２回発生後の思いを俳句にする
夢だけは壊せなかった大震災
Miyo

■むすび塾に参加して ── 宮城・女川町女川中

【3年生に対して思うこと】津波対策の活動をした3年生はすごい。私も実行委員をしてみたいと思った。３年生が取り組んでくれた以上に、私たちも頑張りたい。
＝2年・伊藤千波さん⒀

【倒れたビル、どうする？】要らないと思う。見たくないということではない。ビルを残すために復興が遅れたり、保存にお金が掛かったりという問題が出るのではないか。少なくとも複数残す必要はない。
＝2年・和泉大翔君⒀

【災害への備え】家に食糧やラジオなどを入れた持ち出し袋を準備した。地震が起きたら気付いた人が持って逃げる。家族と避難場所も決めた。これから生まれる子どもたちに震災のことを伝えたい。
＝2年・沢田広夢君⒀

【震災の教訓】人の命の大切さや帰る家のないつらさ、物のない不便さを感じた。災害が起きて、どうしたら良いか分からず迷っている人がいたら、率先して声を掛け、安全な場所に連れていく。
＝2年・黄川田一輝君⒁

【震災の教訓】震災当日の夜、避難所の寒さのために亡くなった人がいた。冬に避難するときは厚着をするなど、体調管理の方法や備えを考えないといけない。
＝2年・鈴木仁君⒁

東日本大震災の教訓を生かすため、河北新報社は地域住民らと一緒に地震・津波に備える巡回ワークショップ「むすび塾」を開いています。名称には、地域と人、人と人のつながりを強め、防災・減災に結び付けていきたいとの思いを込めました。

次回の「むすび塾」は23日、宮城県亘理町のあぶくま町内会で開催します。